SENKEN

繊研新聞

2013年
（平成25年）

7月16日
火曜日

繊研新聞社
発行所

〝こうなるだろう〟ではなく〝こうしたい〟

ifs未来研究所所長 川島蓉子さんに聞く

写真＝鈴木陽介

今日と地続きにある未来を考える

リアリティーのある女性の目線で

伊藤忠ファッションシステム（ifs）は今春、川島蓉子さんを所長にifs未来研究所（未来研）を立ち上げた。研究所員として名前を連ねるのは、経営コンサルタントやプロダクトデザイナー、IT（情報技術）に詳しいジャーナリスト、ファッションデザイナーなど分野を横断した7人。未来研が考える未来に、ファッションビジネス業界活性化のヒントを探る。

経営に感覚やデザインを

――未来研立ち上げの経緯は。

ifsの小野裕孝社長と面談する中で、「茫漠とした未来を研究してみたい」と言ったことがスタートです。この数年考えていたことですが、平成不況やリーマンショックでどんどん世の中の元気がなくなり、民主党政権できさらに良くない状況になった。私はデザインや開発寄りのマーケティングを仕事としていますが、現場の人に余裕がなくなっている。資金も人も時間もなくなっています。

組織も細分化されている。細分化はもともと意味があってやったことですが、それによって横串で何かやろうとするとできなくなっている。自動車だったら自動車業界の中だけで、別の業界とつながることができない。そうした問題をブレークスルーしたいという依頼がよくきますし、それが未来を作ることではないかと感じていました。日本の企業をもっと元気にしたいという思いもあります。

ifs入社以来思っていることですが、経営には感覚やデザインが必要ではないでしょうか。先を作るには定量的データだけでなく、感覚やセンスが必要です。企業トップに話を聞く機会が多いですが、彼らは新しいことを、強い危機感を持って求めている。でも、組織が硬直化していてできない。今こそ、感覚やセンスといった意識を企業トップに持って欲しい。5月に行った未来研立ち上げのプレゼンテーションも、全て感覚に訴える内容にしました。

――具体的に何をするのか。

目線でいいと思うんです。女性がリーダーで、女性ならではのリアリティーのある目線でやる研究所って、他にないと思います。

研究所メンバーは、異なる業界から迎えないと意味がないと思いました。あと、未来なんだから少し若い世代です。7人はみな、何らかの創造的な仕事をしている人たち。未来は予測するものではなく、今いる人たちが作っていくものであり、そのためには創造的でないといけませんから。基本的に、プロジェクトごとに複数人が関わります。「一人でやるならifsの既存の仕事と変わりません。複数の人が組み合わさって、化学反応が起こる場が未来研です。

川島所長と7人のメンバーが近未来に向けたライフスタイルを発信

100年後の予想をやっている研究所は他にあります。未来研は10年後くらいを視野に、「こうなるだろう」ではなく「こうしたい」を考えます。今からジャンプして未来があるのではなく、今日の地続きに未来がある。「今日は未来だと思います」をスローガンに、具体的なライフスタイルを発信します。このような考え方って、ファッション産業にはもともとシステムとして組み込まれているものです。

マクロの経済指標で暗い未来を描いてもしょうがない。こんな暮らしがいいって考えるのって、女、子供の

不便だけれど快適なもの

――未来研が考える未来とは。

今、アナログからデジタルへとコミュニケーション手段が圧倒的に変わりつつある。暮らし方もがらりと変わるでしょう。過渡期にあってスペックや機能が先に行ってしまい、人は置いてきぼりという状況が生まれています。そこで着目したのが「不便だけれど快適なもの」という切り口です。便利だけれど不快なものがいまの新製品にはすごく多い。不便だけれど快適なものを未来研で議論していきます。

具体的には、メンバーが日本全国好きなところに旅して、不便だけれど快適なものを探してくる。工芸もあれば工業製品もあるだろうし、変なお土産物もあるでしょう。それらから問題解決のための共通項を探し、今あるものに加えて発表する。できれば企業と一緒に何かを開発して、来春発表したいと思っています。

業界の中の人だけが分かる仕事はしたくない。一般の人が見て、未来ってなんかいいな、この人たちって面白いなと思ってもらえるようなものにしたい。ありがたいことに仕事の依頼がすごくきています。5月のプレゼンにも非常に多くの方に来場いただきました。いま、未来がいろんなところで気にされていて、前に向かって動きだそうという潮流があるのだと思います。